上から高柳の住宅内部、高柳の住宅外観（石川県金沢市、2006年）T-house内部、T-house外観（石川県金沢市、2005年）　写真：池田ひらく

んです。それから『かっぽう着でも行けるような』というようなことも市長は仰っていました。敷地は街の中心部にあったので、誰でも気軽にどこからでも入れるような、どの方向も正面であるような円形の建物を考えていました。気楽に行けて、用がなくてもフラッと行って休憩できるような場所にしたいというのも、市長のお考えと方向性が合致していたようです」

ここでも彼は良き巡り会いをたぐり寄せている。キューレーター長谷川祐子氏だ。普通、キューレーターは後で決まることが多く建設の設計段階から入らないが、彼女と早い段階から具体的な話をしながら設計を進められたことがこの美術館の大成功の伏線となる。金沢市も含めた三者間で「どうしたいのか」を話し合ったことがよかった。これ抜きでは建築は考えられないのだ。

「今後の活動としては、公共建築のように大衆の意識の中に入り込んでいくものも当然やりたいのですが、どんどん規模が大きくなるばかりではなく、一般住宅、個人住宅を生涯やり続けていきたいですね。住宅というのは生活の基盤だと思うんですよ。ホームベースというか、生き続けていく環境として最も重要なところ。人間って本当に人それぞれなので、各々の考え方や生活によって出来上がる住宅が違ってくるはずだと思うんですけど、逆に住宅に生活を合わせているという現状がどうしても多くなっている。それは違うんじゃないかと。だから、その人のベースとしての住宅というのは物凄く重要な位置にある。建築をやっていて面白いのは、いろいろな人に会ってそれぞれの価値観を聞いて、自分の常識を超える出会いがあることですね。それによって引出しが増えるというか、考えられる範囲もどんどん広がっていくと思います。クライアントと対話することによって、建築を通じてお互いがより豊かになれるといいですよね」

住宅は一番の根本。〝プラスα〟や新しい発想が生まれたり、気分がよくなったり、心地よくなったり。そんな場所、空間をつくっていきたいと彼は語る。心地よくリラックスするところであることは当たり前で、プラスαの何かが含まれているべきだ、とも。

「まずは敷地条件から始まって、どうすればより良くそこに暮らせるかということを住まい手と相談するわけですね。僕としては、あるところまでつくっておけば、あとはもう自由に使ってもらっていいと思っているんです。それはやっぱり美術館の場合と同じで、きれいにつくっても別にきれいなまま使わなくてもいいと思うし、それは僕が設計している住宅でもそう思いますね。白い壁の部屋があって、『壁が白くてきれいだけど、子どもが汚しちゃいそうだな』なんていう話を聞いたりすると、『いや。それはもう汚してもらっていいんじゃないですかね』とか言って。僕としては乱雑に使ってくれてもいいんですけれど、でもどういう使い方をしても変わらない空間の構成であるとか、骨格であるとか、窓の配置であるとか、そういうすごく大きなところだけはうまく示してあげたい。でもそこから先はその人なりに使ってもらうほうがいい。だから、あまりつくり込みすぎると、逆に生活を規定してしまうようなところがあるから、そういう意味でも、どこまでやるかというバランス感覚が必要なんじゃないかなと思います。僕は与件に合わせて何ができるかということを考えていくほうですね。自分の考えがあんまり強くあるというのも、ちょっとおかしな話だと思うので。今度はこれでいこうと思っていても、そんなのに合うお客さんは来ないし、はめ込もうとしても無理が来るわけだし。なるべく頭は真っさらにしておいて、その場で考えたほうがいいんじゃないかなと思っているんです。プラスαという話は、分かりやすい例で言うと美術館で作品を見るようなことですね。美術作品は生活必需品ではないけれど、自分自身や生活を豊かにしてくれるものです。そういった気持ちの豊かさを与えられるものを建築として考えていきたいと思っているんです」

あきらめちゃいけない、と彼は語った。何をやるにもエネルギーが必要で、設計活動でも工事現場でもそれは同じ。これは無理だという場面に出くわした時、大ざっぱにではなく、何とかそれを実現するための具体的な方法を探せば、大体のことは何とかなる。「もう駄目かな」と現場をやるたびに必ず一度や二度は思う時があるが、何とかしなきゃとやっていると本当に何とかなる。これをやると決めたら本当にあきらめちゃいけない。彼は日々そう強く思っている。